特別企画

グローバル化を牽引する全国61大学が大集合!

第2回 GO GLOBAL JAPAN EXPO 開催レポート

グローバル人材の育成が叫ばれながら、日本の高校生・大学生の内向き志向が教育界・産業界の課題となっている中、「第2回GO GLOBAL JAPAN EXPO」が2014年12月、関西学院大を会場にして開かれた。当日は、全国から5374人の生徒と保護者が来場。海外に羽ばたく若者たちの志を育む国内最大級の教育イベントをレポートする。

EXPOの会場である関西学院大西宮上ケ原キャンパスの中央講堂は、開始前から大勢の高校生の熱気で満たされていた。友達と一緒に来た生徒、保護者と連れ立って来た生徒、そしてクラス・学校単位で参加しているグループなどで広い会場は埋め尽くされ、生徒たちが期待にあふれるまなざしでステージを見つめていた。

「GO GLOBAL JAPAN EXPO」は、文部科学省、「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援」採択大学42校が主催する高校生参加型の進学・留学促進イベントだ。2013年に早稲田大で行われた第1回に続き、14年12月、関西学院大で第2回が開催された。前述の42校に「スーパーグローバル大学創成支援」の採択大学などを加えた全61大学、更に各国大使館、留学を支援する団体や企業等が集結。産学官を挙げてグローバル人材を育成しようという決意がうかがえる。

午前の部は、「Listen & Feel Stage」と題して、中央講堂で講演やトークセッションが開かれた。テーマは「2020：私はこう変わる～東京五輪のときの世界と日本～」。東京オリンピックが開催される2020年は、今の高校生の多くが大学を卒業して社会人として歩み始める時期と重なる。そこで、東京オリンピックをキーワードに、近未来の世界や日本の姿、自分の姿を思い描き、どう変わっているのか、変わるべきなのかを一緒に考えようというのが狙いだ。

日本人の留学者数は04年の8万3000人を

会場では、参加大学、大使館、企業、団体がブースを出展し、来場者の様々な質問・疑問に答えた。

参加大学

◎国立大　北海道大、東北大、筑波大、埼玉大、千葉大、お茶の水女子大、東京大、東京医科歯科大、東京海洋大、東京外国語大、東京藝術大、東京工業大、一橋大、新潟大、長岡技術科学大、金沢大、福井大、名古屋大、豊橋技術科学大、京都大、京都工芸繊維大、大阪大、神戸大、奈良先端科学技術大学院大、鳥取大、岡山大、広島大、山口大、愛媛大、九州大、長崎大、熊本大

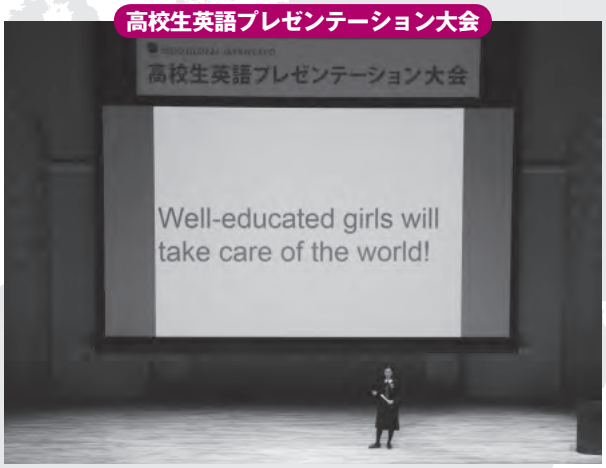
◎公立大　国際教養大、会津大、愛知県立大、山口県立大、北九州市立大

◎私立大　共愛学園前橋国際大、神田外語大、亜細亜大、杏林大、慶應義塾大、国際基督教大、芝浦工業大、上智大、昭和女子大、創価大、中央大、東洋大、法政大、武蔵野美術大、明治大、立教大、早稲田大、国際大、愛知大、京都産業大、同志社大、立命館大、関西学院大、立命館アジア太平洋大

ピークに減少の一途をたどり、現在は6万人を切っている。先進国で減少しているのは日本だけだ。そのような状況を踏まえ、開会の挨拶に引き続き行われた基調講演では、下村博文文部科学大臣が、地球規模の課題に対する日本への期待に応え、経済活動の世界的な広がりに対応するためにも、グローバル人材が求められており、既成概念にとらわれないチャレンジ精神、外国語によるコミュニケーション能力、海外の文化・価値観に関心を持ち、柔軟に対応できる力が必要と訴えた。「自分の可能性を信じるのが第一歩。そのためには志を持つこと。今日ここにいる皆さんは、既にその一歩を踏み出した」と高校生にエールを贈った。

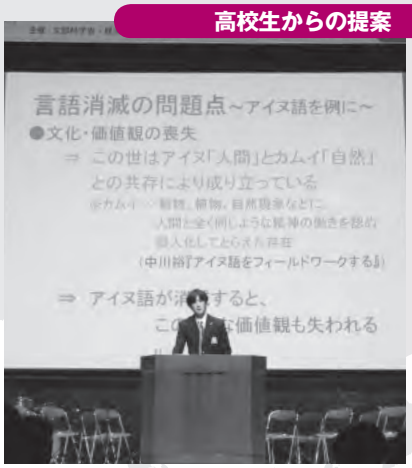
続く、「高校生からの提案」では、2人の高校生が登壇。「2020：日本ができること、私がしたいこと」をテーマに、自分の夢を力強く語った。午前の部最後のトークセッションでは、関西学院大大学院教授でもあり、ニュース番組のキャスターを務める村尾信尚氏がコーディネーターとなり、下村大臣、元メジャーリーガーの田口壮氏、指揮者の西本智実氏、株式会社ワークスアプリケーションズCEOの牧野正幸氏が、活発な議論を交わした。特に聴衆を引き付けたのは、各々が海外で経験した困難や失敗談の数々だ。壇上のゲストも決して特別な存在ではなく、自分たちと同じように悩みや不安を抱えた時代があったことを知り、勇気をもらった高校生も多かったことだろう。「失敗は挑戦者であることの証」という

高校生英語プレゼンテーション大会



予選を勝ち抜いた7人の高校生が、「世界の中の日本 いま私ができること」をテーマに英語で自分の意見を発表。審査員からの英語の質問に対しても、滑らかな英語で回答し、堂々とした姿を見せた。観覧した兵庫県の高校2年生の女子は「英語が流暢な上に構成もしっかりしていてすごい。自分も国際関係を目指しているので頑張りたい」と意欲を語った。

高校生からの提案



2人の高校生が「2020：日本ができること、私がしたいこと」をテーマに提案。平和への貢献、異文化理解の大切さなど、グローバル社会で何をすべきか、将来に向けた自身の夢を語った。

早稲田実業学校
高等部3年
大山夏実さん

関西学院高等部
3年
井上大智さん

トークセッション

登壇者

指揮者
西本智実氏

元メジャーリーガー
田口壮氏

下村博文
文部科学大臣

株式会社ワークス
アプリケーションズ CEO
牧野正幸氏

関西学院大大学院教授
日本テレビ NEWS ZERO
メーンキャスター
村尾信尚氏

トークセッションでは、大山さん、井上さんの2人の高校生も加わり、「世界へのチャレンジは面白い」「2020年までに日本はどう変わるべきか」「未来に向けてどんな大人を目指すべきか」の3つのテーマで話し合われた。それぞれ活躍する分野は異なるが、大きな夢を抱いて世界に羽ばたき、厳しい世界を生き抜いてきた姿勢には共通するものがあった。

村尾氏の言葉が印象的だった。

午後には、高校生が参加するプログラムが目白押し。兵庫県・私立灘中学校・高校の木村達哉先生による「夢をかなえる英語勉強法」、トークセッションに登壇した牧野氏の講演、海外からの留学生が日本での体験を語る「目から鱗！　留学生の日本再発見」など、どのイベントも超満員だった。会場に入れない高校生も多く、イベントに懸ける高校生の意気込みがひしひしと感じられた。

一方、参加大学、協賛団体・企業、大使館、政府系機関の出展ブースでは、担当者が高校生や保護者からの進学・留学の相談に乗ったり、英語学習、海外就職などに関する質問に答えたりしていた。外務省国際機関人事センターのブースを訪れた大阪府の高校3年生の男子生徒は、「ウェブサイトだけでは分からない留学や国際機関の情報が聞けた」と満足そうに話してくれた。また、徳島県から来た高校1年生の女子生徒は、「留学は敷居が少し高いように感じていた。でも、今日、講演を聞いたり、ブースを回ったりしているうちに、自分にも出来るかもしれないという思いを抱いた」と語ってくれた。

関西学院大の村田治（おさむ）学長は、「EXPOはグローバル時代の新しい扉」「異なる人との出会いが人を成長させる」と語った。このイベントで刺激を受け、世界への第一歩を歩み出す高校生は必ずいるだろう。そうした未来への希望を感じさせる1日だった。

自分、ミライ発見！　カフェ

「自分、ミライ発見！　カフェ」では、気軽にお茶を飲みながら、海外留学体験を経てグローバルに活躍している社会人の人生経験を聞き、高校生が自分の将来を描くワークショップが開かれた。社会人は、人生の浮き沈みを波のグラフで表した図を片手に、気負わず語り掛けていた。一般社団法人グローバル教育推進プロジェクト主催。

目から鱗！　留学生の日本再発見

世界各国の留学生が見付けた「日本らしさ」を英語で報告。アメリカ、ドイツ、韓国、タイ、ニュージーランド、トーゴ、ノルウェー、ロシアと様々な国の留学生が、日本の車文化や歴史、誠実な国民性などについて、自らの体験や見聞を語った。高校生にとって、外国の人から日本がどう見られているのかを感じる機会となった。

EXPOに来て、どうでしたか？

高校生

◎勉強はあくまで大学に行くためのもの、大学を卒業した後は就職と、人生を漠然と考えていました。今日の話を聞いて、早いうちに留学をして自分を高めたいと思うようになりました。（大阪府・1年生・男子）

◎留学を希望しているのですが、家庭の経済事情で実現は厳しいと思っていました。今日、政府の支援もあると聞いて、挑戦しようという気持ちが改めて湧いてきました。（徳島県・1年生・女子）

◎英語学習の参考になると思い、灘中学校・高校の木村達哉先生の講義を聞きました。学校の先生が普段話していることと同じことを言われていたので、授業の大切さを改めて感じました。（大阪府・2年生・女子）

保護者

◎私の学生時代は、留学は特別な人がするというイメージがありました。でも、子どもの留学について考える上で、今日のイベントは良いきっかけになりました。（大阪府・1年生男子の保護者）

◎留学は、費用だけでなく治安など心配なことも少なくありません。大学にどの程度サポートしていただけるのか、いろいろなブースを回って聞くことが出来て参考になりました。（大阪府・2年生女子の保護者）

大学

◎ブースを訪れる高校生からは、大学で何が勉強できるか、英語の勉強はどうしたらよいか、留学先にはどのようなところがあるのかといった質問が寄せられました。他大学とも、ライバル関係を超えて一丸となり、グローバル人材の育成に取り組んでいくつもりです。（国際基督教大）

◎今回は関西が会場なので、北海道のイメージがない高校生ばかり。まずは北海道大のことを知ってもらい、新渡戸稲造の精神を若い世代に伝え、日本から世界に羽ばたく学生を育てたいと考えています。（北海道大）

在日大使館職員インタビュー

海外留学は人生を変える！

カナダ大使館
アラン・シュローダー氏

高校生や保護者からの主な質問は、高校卒業後に正規のルートで直接留学するのと、日本の大学に入学し、そこでの制度を利用して協定校に留学するのとどちらが良いかというものです。留学の方法は様々です。ご自身に合った方法と時期が見付かると思いますので、十分に情報収集をし、検討してください。大使館主催の留学フェアや説明会などもあります。カナダの場合、正規留学には卒業後就労許可プログラムがあり、卒業後最長3年間カナダでの就労も可能です。ブースを訪れた人たちは意欲があり、真剣にカナダへの留学を考えている方がほとんどで、私も非常に手応えを感じています。日本の若者には1人でも多く、海外留学をしてほしいと思います。私も日本やアフリカなど、様々な地域で学び、人生が大きく変わりました。世界はとても広いです。海外経験を通して広い視野を培うことで、将来は必ず明るいものになるでしょう。

高校教師インタビュー

国内でも英語や多文化理解が必要な時代に

京都府・
私立京都文教中学校・高校
野口佳子先生

今日は、担任をしている学級の生徒全員を連れて、午前の部の「Listen & Feel Stage」と、木村達哉先生の「夢をかなえる英語勉強法」に参加しました。生徒たちは、「高校生からの提案」で同世代の生徒がしっかりした考えを持っていることを知り、大きな刺激になったようです。木村先生の講義にとても引き付けられ、同じ英語教師として教え方に賛同できる部分がたくさんありました。今後も先生からぜひ多くのことを学ばせていただきたいと思いました。

学校には、自分の考えを人前で述べるのが苦手な生徒もいます。しかし、これからは日本にもどんどん海外から優秀な人が来て、一緒に働く機会も多くなるでしょう。国内で働くにしても、英語のスキルや多様な価値観を受け入れる素地が必要になります。こうしたイベントで、様々な生き方や価値観に触れて、将来を考えるきっかけをつかんでほしいと思います。

留学経験者大学生インタビュー

出来るだけ早く海外に出て経験値を高めよう！

広島大教育学部4年
内門裕貴さん

私は2014年11月まで、タイのバンコクに留学していました。その経験を伝えたいと、広島大のスタッフとして今回のイベントに参加しました。バンコクに来ている留学生は皆、ネイティブのように英語が話せて、カルチャーショックを受けました。こういう優秀な人たちと競い合っていくのだと思うと、内向きと言われる日本人はいつか負けてしまうかもしれないという危機感を抱きました。それだけに、5年後、10年後を見据えてグローバル化を進めるこのイベントは、とても意義深いと思います。

私は本格的に英語学習を始めたのが遅く、大学2・3年生で猛勉強し、4年生でようやく留学を決心しました。もっと早い学年で留学すれば、それだけ経験値が高まり、将来のチャンスも増えたと思います。高校生の皆さんも英語をしっかり学び、出来るだけ早く海外経験を積むことをお勧めします。